

世代間で価値観が違ふ。それは、当たり前のことである。20代と50代とが同じ職場で働いている。話題が合わないことがある。無理のないことである。以前ならば、そうだった。ところが、近年、世代間の価値観の差はむしろ縮まってきている。

ここのところ、昭和ブームである。小学生ぐらいの子どもが、昭和について熱く語ったりする。最初はすごいなあと思っていたが、だんだんと慣れてきた。それだけ、昭和という時代には魅力があるということだろう。

生活者の意識や好み、価値観などに関して、年齢による違いが小さくなってきている。この現象を「消齡化」と名づけた人がある。例えば、食分野では、かつての高齡層は和食を好む人が多い傾向があった。今は、ハンバーグが好きと答える60代の方が20代と変わらないほどいる。ワークライフバランスやジェンダーについても、若い人だけでなく60代にも理解を示す人が多くなっている。若年層と高齡層の意識の差は縮まっている。

新しい人気作品は話題になればみんな知っている。一方、昔の作品はというと、自分が見つけ出したという特別感がある。若い人にとっては、自分から遠い分、新鮮に感じるのかもしれない。

なぜ消齡化が進んだのだろうか。戦前生まれの人口が減り、戦後に生まれた人たちが活躍するようになり、古い価値観が薄らいできた。また、シンプルにバイタリティーのある元気な高齡の方が増えた。かつて世代ごとに趣味が分断されていた時代から、何歳になってもどんな趣味をもってもいいという世の中になった。このような背景があるのではなかろうか。結果として、いい年をしてとか、年相応のとか、適齡期など、人を年齢でくくっていたような言葉は死語になっていくのかもしれない。

世代間ギャップが縮まり、異世代との話がしやすい時代がやってきた。現在の職場である幼稚園の職員室には、30代前半と後半、40代、50代、60代と各世代がそろっている。50代と60代の話題に、意外と30代前半がついてきてくれる。何だかうれしい。

職場で話題が合うというのは重要なことである。雑談ができるということである。雑談もできないのに、相談というのではハードルが高い。相談以前に雑談もできないのでは辛くなってしまう。働く意欲も湧いてこないだろう。とりあえず、消齡化社会を生きる60代として、年を重ねても、元気で若々しく活躍したい。そして、若い人たちとの会話を楽しめるようにしたい。それが、職場の雰囲気作りにも役立つものと考えている。